



TITLE:

世界經濟論の對立に就て

AUTHOR(S):

名和, 統一

CITATION:

名和, 統一. 世界經濟論の對立に就て. 經濟論叢 1932, 34(3): 615-624

ISSUE DATE:

1932-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130149>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第

卷四十三第

行發日一月三年七和昭

論叢

官吏の俸給 法學博士 神戶正雄

魚食論 法學博士 財部靜治

統計系列論に於ける一課題 經濟學士 蜷川虎三

時論

軍事費の支辨方法 經濟學博士 沙見三郎

金再禁後の爲替相場 經濟學士 谷口吉彦

研究

紀州家名目金 經濟學士 菅野和太郎

長期景氣波動と世界恐慌 經濟學士 柴田敬

助郷制度に就いて 經濟學士 黒羽兵治郎

說苑

世界不況對策としての國際貸付銀行案 經濟學士 松岡孝兒

印度鐵道の世界的地位に就て 經濟學士 金持一

世界經濟論の對立に就て 經濟學士 名和統一

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

世界經濟論の對立に就て

名和 統一

世界經濟概念構成の出發點を各個經濟に求むるか、國民經濟に求むるかに就ては世界經濟論が提唱され始めてから引續きその根底に横はる所の重要な一つの課題であつて、最近では例へばビーコンシュトックとレンナーとの間に、彼等ともに獨逸社會民主黨の公認學者あり乍ら、この根本的對立があり、更に昨年殆んど時を同じくして公刊されたレーブゲ教授とワーゲマン教授の各々の世界經濟論に於ても矢張この對立が明瞭に看取せられる。今この機會にレーブゲとワーゲマンの見解を紹介する事に依て、この課題に少しく觸れて見たいと思ふ。

(註一) 彼は同一國境内部で演ぜられる經濟關係の總體を國民經濟となし、國境を超えて各私經濟間に結ばれる關係の總體を世界經濟となし、世界經濟を國民經濟の總括となすを誤れりとする¹⁾。

(註二) Renner は Biensstock の上の見解を排撃し、私人の商會(モルガン家の如き)が尙世界經濟的に活動し、他の私人の商會と契約を結ぶものではあるが、私人の商會はそれの際彼等の國家の許容の範圍に於て、國家の指令に従つて行爲するものであつてその經濟効果は全く其國家の地位、他の國家との條約に依て決定され、正に國家が資

1) Biensstock, Gregor : Einführung in die Weltwirtschaft, 1927. S. 11.

本投下、商品販路の方向を指導し、國家の通商局がその金融業者及び商人軍團に命令するのである。世界經濟は斯様にして國民經濟の一種の眼に見えざる聯邦となつたと述べてゐる。²⁾

一

レーブケ教授はその著「世界經濟と外國貿易政策」(Röpke, W.: Weltwirtschaft und Aussenhandelspolitik, 1931)の始めに於て世界經濟と國民經濟とに就て次の如く述べてゐる。

『吾々の無限に複雑な、高度に發達し、極めて精緻なる欲望の満足は所謂社會的分業の原則、即ち一定財貨及び給付の產出に自己を専門化し、斯の如くして生産された生産物を相互に交換する事に依て、彼等自らの厚生に必要な財貨を所有すると云ふ原則に従つて行はれるものであつて、¹⁾『この分業的生産と相互的交換の紐帶の極めて複雑に錯綜せる經濟社會は、國民的又は國家的範圍に局限されるものではなくて、今日では全開化世界を包括するものである。²⁾吾々の日常生活に於て世界の種々なる大陸の貨物を費消し、從て種々なる

大陸の人々とたとへ間接的なりとは云へ何等かの經濟關係を結んでゐる事は經驗の明かに示す所であつて、吾々の經濟生活は世界化されてゐると云ふも過言ではない。

『吾々が理論的國民經濟學の對象として複雑に錯綜せる分業的生産と相互的交換關係の網を把へ、之を國民經濟と名付ける』³⁾ならば、『斯の如き理論的國民經濟の意味での「國民經濟」と世界經濟とは何等對立する概念ではない。⁴⁾』最近この意味で誤解を招き易い「國民經濟」なる言葉の代りに「社會經濟」なる言葉を用ひてゐる。⁵⁾從て『世界經濟なる表現は現今の社會經濟の地理的、歴史的特性を特に強調せる以外の何ものでもない』⁶⁾事となるのである。然らばひとが世界經濟を國民經濟と對立せしめ、世界經濟は諸國民經濟より成ると云ふ風に考へてゐる時には、國民經濟なる概念は如何に把握されてゐるのであるか、それは上述の理論的意味での國民經濟とは全く異なる所の、『一國の國家境界に依て形成されたる世界大の社會經濟の具體的斷節』⁷⁾の意

2) Renner, Karl: Staatswirtschaft, Weltwirtschaft und Sozialismus, 1929. S. 35 ff.

1) Röpke, a. a. O., S. 9.

3) ebenda.

5) ebenda.

7) a. a. O., S. 11.

2) ebenda.

4) a. a. O., S. 10.

6) ebenda.

味で用ひられてゐるのであり、吾々が獨逸、英國或は佛蘭西の國民經濟と云ふが如き場合之である。而して彼は次の如く主張する。

『吾々はこゝで國民經濟と世界經濟との關係は、丁度各個經濟と國民經濟と同じ關係にある、云はゞ各個經濟と世界經濟との間の比例中項を形作るかの如き容易に陥り易い見解と爭はねばならぬ。……國民經濟と世界經濟とは等しく抽象であつて、社會經濟の程度差位に外ならず、その行爲する人格は兩者に於て共に各個經濟である。國民經濟はその精密の度に於て世界經濟より優れ、世界經濟はその廣汎の度に於て、經濟諸關係の地理的廣さに於て國民經濟より優れてゐる。國民經濟の場合では相互に交通に入込む所のものは國家境界内で見出される各個經濟であるが、世界經濟は相互に交通し合ふ各個經濟が相異なる國上に於てその住所を持つ事に依て國民經濟と區別され、それが世界經濟を特徴づけるものである。しかも兩者の根本的本質相等性は失はれない。各國民經濟が社會主義的に組織されてゐる場合には——それに依て國民經濟は大株式會社と比較される如き巨大なる各個經濟となる、——世界經濟は個々の國民經濟より構成されると考へるのは間違ひでなからう。……その争が起らない限り世界經濟の特徴とその問題を定めるに於て、次の争をはつきりと認識しておく事が何より肝要である。即ち國際經濟交通では國民交

通に於けると同様、個々の商人が問題となるのであつて、只この際ハンブルグ、ベルリン、ミュンヘンの代りに、ハンブルグ、ロンドン、ウィーンに彼等の住所を持つと云ふ差異があるだけである。吾々はロマンティックの言葉の霧を取拂ひ、世界經濟の根底をなす所のものは種々なる國民性を持つた多數の個人の赤裸々なる日常の活動、即ち相互に値切り、競争し、協同し、賣り、買ひ、借金し、貸付け、且之等の取引に於て彼等の生計を營み、富裕になつたり、破産したりする争以外の何物でもない」と云ふ見解を立てんと専心努めるものである。』

『世界經濟は國民經濟とは別個の法則に従ふものではない。……國境は何等か恣意的なものであり、動物的有機體の外皮との比較は全く大膽にのみ行はれ得るものである。獨逸と奧太利との經濟交通を獨逸國內の經濟交通と區別する所のものは一體何であるか、ミュンヘンとウィーンとの經濟交通はミュンヘンとハンブルグとの經濟交通と一體何の點が異なるのであるか、第一の場合では交通の相手方を國境の彼岸に求め、従つて交換經濟的分業の範圍が擴張されてゐると云ふ點を除いて、明かに根本的には何等の區別も見出し得ない。世界經濟交通に於ても一國の内部に於けると同様なる計慮を行ふものであり、即ちひとは最も安い所で買ひ、最も高い所で賣るのである。……しかも凡そ分業はその本質上二面的であり、兩側にとつてともに利益になるものである。購買と販賣、

輸出と輸入とは相互に制約し合ふのである。⁹⁾『吾々は貿易勸義の意定の習慣的過重評價¹⁰⁾』から解放されねばならぬ。

斯の如く『國內交通と對外交通、國民經濟と世界經濟とは根本に於てその本質相等性を有するものであるにも拘らず、對外貿易を國內經濟交通から區別する』¹¹⁾ものは何であるか、『社會經濟が世界經濟にまで擴張してゐるにも拘らず、個々の國民經濟が、經濟的錯綜の稠密なる地域 (Dichtgebiete) として止まる』¹²⁾所以は何であるか。『人類が國家なる政治的單位に分裂してゐる事實が如何なる經濟的意義を持つかを問題とする時に、國民經濟は集結化要因と名付けられる統一化的諸力の性質を認識し得るであらう。』¹³⁾となし、政治團體たる國家が同時に (1) 財政共同態 (Finanzgemeinschaft) (2) 經濟政策的共同態 (wirtschaftspolitische Gemeinschaft) 殊に關稅政策 (3) 決濟共同態 (Zahlungsgemeinschaft) (4) 運命共同態 (Schicksalsgemeinschaft) 從て性格共同態 (Charaktergemeinschaft) となる事を擧げてゐる。¹⁴⁾然しかくして一定の統一性と封鎖性を帯びられた國民經濟も、

彼の立場からする時は、かゝるものとして相互に交渉し合ふものとは見做されないのである。尙彼の世界經濟概念の中には世界大の社會經濟のそれと、兩者とも社會經濟の抽象にして、程度差位に過ぎずとなす場合、即ち社會經濟内部に於て國民經濟と並立せるそれとの區別及び關係が明瞭にされてゐない事が彼の所説を理解する上に困難となつてゐる事が指摘されるであらう。

(註) 之等の點につき Kopie よりも個人主義的見地を遙に徹底せしめてゐるものに Sulzbach がある。彼は國民經濟を Dichtgebiete としても認めない。地表の凡ゆる空間は連續的に相互に übergehen するものであつて、近隣者間に市場が形成されるにしても、國民が買ふ事を意味すべき國民的市場又は國內市場は近接市場 (naher Markt) と合致するものではない。國家が經濟世界を人爲的に區劃し、その上に Einheit を要求するにしても、それは國家の側に於て然るのであつて實質的にその中に經濟的 Einheit を具有するものではないと云ふのである。(Sulzbach, W.: Nationales Gemeinschaftsgefühl und Wirtschaftliches Interesse, 1929, S. 24 ff. 及び Der Wirtschaftliche Begriff des Auslandes, Weltwirtschaftliches Archiv, 32 Band. (1930 III), S. 55 ff. 參照)。

9) a. a. O., S. 11-12.
10) a. a. O., S. 11.
11) a. a. O., S. 12.
12) a. a. O., S. 14.
13) a. a. O., S. 12.
14) a. a. O., S. 13-14.

次にワグマン教授の「世界經濟の構造と律動」(Struktur und Rhythmus der Weltwirtschaft, Grundlagen einer weltwirtschaftlichen Konjunkturlehre, 1931)に於て取られた世界經濟の概念構成の仕方を見よう。

彼は世界經濟を『生産諸條件の場所的相異、國際法關係、財貨、人及び通信輸送の大設備の上に建てられた諸國民の生産消費の聯繫¹⁾』であるとなす。更にこの概念を分析して、『個々の國民經濟及びその内部の諸組織の中に總括されてゐる經濟主體(各個經濟)の協働(Zusammenwirken)は狹義の世界經濟である』²⁾となし、『世界經濟の概念を單に直接の國際的交換交通に限らず、この直接の交換交通からは極めて多様の諸作用が放射されるが故に……交通に依て結ばれたる諸國民經濟の總體を世界經濟の範圍となし』³⁾從て『市場交通から全然切離された經濟はこの世界經濟の外に立つ』⁴⁾事となる。『之等のもの、例へば自己生産、自己支給をも包攝し、例へば穀物の世界生産を確定せんとする時

世界經濟論の對立に就て

には、それは人類の總體經濟を包括する最廣義の世界經濟を云ふ事になる。⁵⁾』

彼にあつては『世界經濟はそれ自らの生活法則に従ふ一種の超國民經濟的有機體である』⁶⁾が、今述べた如くそれを直接に經濟主體の協働とは見ない。各個經濟は『それ自身が生きた一つの有機體である』⁷⁾所の國民經濟の中に總括されて丁ひ、各個經濟が直ちに世界經濟を構成するのではなく、各個經濟の活動は國民經濟の機能と見做され、『諸國民經濟が關係に入込む』⁸⁾事に依て世界經濟は形成さるゝのであり、從て『世界經濟は極めて種々なる經濟組織の一束(eine Bündelung der verschiedenartigsten Wirtschaftssysteme)として現はれる』⁹⁾斯の如く彼の世界經濟の出發點をなすものは國民經濟であり、この國民經濟が如何に把へられ、それが相互に關係する事に依て世界經濟が如何に成生せられるかの過程を今少しく詳細に見究めよう。

『凡ての國民經濟は各々その特有なる狀相、固有の性質、内在的な組織を持つものであるが、それは地域及

1) Wagemann, a. a. O., S. 5.
3) ebenda.
5) a. a. O., S. 5.
7) a. a. O., S. 170.
9) a. a. O., S. 7.

2) ebenda.
4) a. a. O., S. 4-5.
6) Vorwort, V.
8) a. a. O., S. 5.

び發展時代に從つて異なる自然的、地理的、人類學的、心理的、政治的、法律的、技術的諸與件から生ずるのであり、之等の諸與件を構造要素と云ひ、その總體を構造 (Struktur) と云ふ。¹⁰⁾『經濟組織とは國民經濟に於ける構造より生じたる經濟諸力の關聯と秩序とを云ふのであつて』¹¹⁾『構造要素の組合せは無限に多様であり、それに對應して經濟組織を分類するに就ても多數の區別標徴が擧げられるわけである』¹²⁾が、彼は形式と内容の概念對に做つて組織形態 (Organisationsformen) と強度差位 (Intensitätsstufen) とを撰ぶ。¹³⁾組織形態は國民經濟の「規制力」(regelnde Kräfte) であり、強度差位はその「創出力」(schaffende Kräfte) である。¹⁴⁾組織形態を経済的動機に從つて、營利經濟と欲求經濟とに分ち、その達成の可能性に從つて自由經濟と拘束經濟の原理とに分ち、次の如き分類を得る。(1)自由欲求經濟(2)自由營利經濟(3)拘束營利經濟(4)拘束欲求經濟。¹⁵⁾強度差位を生産諸要因の混合關係に從て(a)非資本制(b)新資本制(c)半資本制(d)高度資本制經濟地域に分つ。¹⁶⁾こゝで資本制

(Kapitalismus) とは「物財資本裝備の程度」を云ふものであり、¹⁷⁾從來の用語資本主義とは一致するものではないが、しかし強度差位と組織形態との間には例外は少くないにしても或種の親和性^{アフィニティ}の存在が確認され、(新資本制と自由營利經濟、半資本制と自由欲求經濟、高度資本制と拘束營利經濟)¹⁸⁾『非一、新半一、高度資本制なる表現がそれに對應せる組織形態にも移植される。¹⁹⁾かくて彼は世界經濟の凡ての國民經濟をこの標徴に從つて分類し、經濟諸事象、從て景氣變動は『宛も光線の進行はそれが貫く物體に依て規定されると同様に經濟組織の性質に依て著しく左右される』²⁰⁾と説く。

斯の如き經濟組織への關心の奥には彼の所謂『有機的—生物學的原理』(das organisch-biologische Prinzip) が藏されてゐる事が吾々の注意を惹く。『國民經濟は一の生きた有機體であつて、動植物の生物體と同じく、その凡ての部分の密接な聯結——その凡ての機能の密接な協働、相互關聯から生ずる聯結を有するものである、加ふるに一の特質、運動の自律性と名づけられる

10) a. a. O., S. 14.
12) ebenda.
14) ebenda.
16) a. a. O., S. 23.
18) a. a. O., S. 33.
20) a. a. O., S. 7.

11) ebenda.
13) a. a. O., S. 15.
15) a. a. O., S. 17.
17) a. a. O., S. 31.
19) a. a. O., S. 32-33.

所のものを有する。(1)經濟の凡ての部分は密接な機能的聯繫に於て存在し、自己の法則に従ふシステムを作る。(2)外部からの影響は、それが非經濟領域から來ると他の經濟體から來るとを問はず、單に刺激として作用するに止まり、その刺激が經濟有機體に於て自律的運動を惹起する。²¹⁾』

然らば有機體としての國民經濟は如何して相互に關係し合ふか、之等を聯結する所のものは云ふ迄もなく、財貨、勞務給付、及び貨幣資本の國際的交換交通である。而して『その基礎をなす所のものは一は交通技術の進歩に依る國際交通能性であり、他は國民經濟的構造對立である。²²⁾』構造對立は經濟組織、即ち國民經濟的組織形態と、國民經濟的強度差位の對立、或はこの組織外の自然的、國家的其他の與件に存する。この中で『最も強い原動力は強度差位の別で、之が即ち世界經濟の落差(Callie)をなす。²³⁾』之に依て直ちに資本及び勞働の移動を惹起するのみでなく、強度差位の差は同時に國民經濟的生産費差額を生ずるものであるから、更

世界經濟論の對立に就て

に財貨及び勞務給付の交換を生ぜしめるのである。²⁴⁾

各國國民經濟を聯結するこの國際交換交通はその量に於て國內的取引量と比較する時にはまだ極めて僅少である。²⁵⁾だが『國內經濟取引と對外經濟取引とは相互に依存し、相互に機能的關聯を有し、』直接の國際的交換交通は、凡ての國內的交換交通に程度の差こそあり波動し、最も國內的な消費經濟に至る迄長い眼で見ると世界經濟的關聯から免れる事を得ざらしめてゐるのである。²⁷⁾現時の世界恐慌はこの世界經濟的運命關聯の最も深刻なる體驗であつた。²⁸⁾『國際的交換交通の大部分こそ血液循環の如く、地上の凡ての經濟地域を貫流し、そこに世界經濟の生々とした脈搏を生ぜしめてゐる』²⁹⁾かくて『ひとが一般に意識してゐるより遙に世界經濟は一の動的なる統一體を形成してゐるのである。』³⁰⁾と述べてゐる。

以上の如くワーゲマンの世界經濟研究の出發點となる所のものには有機體的國民經濟觀であるが、その構造に關する見解には可成り粗雑な所がないではない。殊

21) a. a. O., S. 70-171. Derselbe, Konjunkturlehre, S. 10 ff. u. S. 185 ff. 谷口
吉彦助教授ワーゲマン教授の「景氣變動論」經濟論叢28卷3號124-125頁參照。
22) a. a. O., S. 360. 23) a. a. O., S. 360-361.
24) a. a. O., S. 361 u. S. 64. 25) a. a. O., S. 122.
27) a. a. O., S. 122. 28) Vowort, V.
29) a. a. O., S. 122. 30) ebenda.

に暗黙の中に政治的領域を經濟領域となしてゐるにも拘らず、國家の經濟への實質的作用を充分に分析せず、極めてナイーブな自然的有機體機構の上に立つてゐる點に就ては批判の餘地が残されてゐると思ふ。

三

私は以上レーブ教授とワーゲマン教授との所説を紹介する事に依て世界經濟に於ける二つの構成原理の一例を提示した。その兩者に於ける個々の點について論理一貫してゐるかどうかを更に深く立入つて批判する餘裕を持たないのであるから、こゝではレーブ教授及びワーゲマンを、必ずしも理想的に適切なものとは云へないが、假に二つの對立せる理論を代表する型と見做し、この對立自體を問題として取上げる事とする。

この對立の中一のみが正しく、他は誤れるものであり、一の理論のみが完全に凡てを説明し得る絶對的なものであり、二者排斥的なものである事が命ぜられてゐるとすればどうなるか。前者即ちレーブ教授に於ては個々の經濟事象の説明に極めて正確を期し得るけれ

ども、何等かの意味で社會的構成體又は形態（社會的大量と云つてもいい）としての國民經濟間の交互作用を説明する事を得ない。例へばアメリカの景氣が日本の景氣に如何に影響するか（日本の個々の商人にとつてではなく、日本の經濟全般に）と云ふ事は説明されない。しかも斯の如き構成體と構成體との交互作用の存在は單に觀念的に肯定し得るのみならず、經驗的にも否定し得ない事なのである。之に對して後者、即ちワーゲマンの說にあつては、正に之と正反對の困難に遭遇する。即ち各個經濟は解消されて單に經濟要因として國民經濟なる有機體の中に總括されて了ふのであるなら、例へば數國民經濟に○がる企業者間より成る所の國際カルテル或はトラストの如き團體の獨自の營利活動は如何に説明さるゝのであるか。斯の如き國際的企業團體獨自の營利活動を否定し、之を一の國民經濟の機能に專屬さし、或は數個の國民經濟に分割せんと企てる如きは現實の運行を歪曲するものと云はねばならない。

斯く觀じ來るとこの二つの理論の對立の中一を取り

て現實の世界經濟現象の一切を説明し去らんとする企ては何れも説明の不可能又は困難を避け得ない。それを敢てなす時には獨斷に陥る危險を醸成するものである。

私はこの對立について次の如き認識の方法に従つて一應解決を得たいと考へる。現實の世界經濟現象は一なるも概念の把握の仕方、即ち世界經濟の考察方法の差異に従つて、等しく世界經濟なる言葉をを用ひるも、その概念内容は全然異なるものである事を先づ明瞭に確定しなければならぬ。一個の經濟的財貨も觀察方法に従て或ひは之を使用價值の具象物として又同時に之を交換價值の具象物として見る事が出来る。同一物も考察の仕方に従て、二つの異なる認識對象を形成し、この二つの認識對象は明確に異なるものであるが、同時に決して二者排斥的なものではあり得ない。之と同様の事が世界經濟の場合にも當筈だと考へる。即ち各個經濟から出發し、地上に於ける各個經濟間の錯綜と見る時の世界經濟と、社會的構成體たる國民經濟から出

發し、地上の各國民經濟相互の交渉より成立すると見る時の世界經濟とは、その構成されたる概念内容に於て全く異なるものである。概念内容の異なる事は與へられたる對象に於て二者排斥的な事を意味せず、反つて兩者ともにその思惟の能力の限界を、即ちその相對性を充分鋭く自覺する事に依て、二つの考察方法がともに可能であり、現實の世界經濟に於ては二つの考察方法に依て把へられたる二つの層がともに並存し得るのである。斯の如き考へ方は只に不當でないのみではなく、現實の世界經濟に對しては少くともこの二つの觀察方法に分つて考察する事を必要とするものであり、それを通じて現實の世界經濟の眞相に近づき得るのである。¹⁾

最後にハルムス教授が「世界經濟の構造轉化」(Strukturwandlungen der Weltwirtschaft)なる講演²⁾に於て展開したる世界經濟の把へ方は私にとつて極めて教訓的であつた。

『世界經濟の研究は統一性及び多様性の事態をとともに等し

- 1) 斯の如き世界經濟の認識論に就ては最も多く相對主義的思惟方法に導かれた。恒藤恭教授、ジューメルの經濟哲學、52頁以下參照。
- 2) Harms, Bernhard: Vom Wirtschaftskrieg zur Weltwirtschaftskonferenz. 1927, S. 243 ff. 1926年9月23日ウィーンに於ける Vereins für Sozialpolitik の總會に於ける講演。

く取扱ふものであり、問題の建方に従つて一或は多がともに社會經濟探究の出發點及び中心點となり得るのである。この争は經濟として吾々が理解する所の凡てのものに妥當する。經濟は形態的統一體として、或は多様性の單なる綜體として考察され得る。第一の場合には經濟は社會經濟構成體 (Socialwirtschaftsgebilde) として第二の場合には社會經濟接合體 (Sozialwirtschaftsgefuge) として現はれる。それに従つて社會經濟理論は構成體論と接合體論とに分たれる。構成體論に就ては、かゝるものとしての構成體、即ち全體に關係を持つ理念、及び目的指定の影響の下に、各個及び全體に於けるその構成的形態が、認識對象であり、この側から經濟は社會との生々とした關聯に於て、國家及び國家間の結合、國法及び國際法に對する經濟の基礎關係に於て見られる。接合體論は其に反して、市場經濟的交換關係の多が一の生々とした關聯に於て止揚せしめられると云ふ事情を考察の外に置く。それは單にかゝるものとしての市場經濟的交換關係をその認識對象となし、機械論的—量的理論として、根本的には孤立化的方法に結びつけしめられ、具體的存在に應用するに際しては遞減的抽象の原理に従つてなすものである。

世界經濟の構造とその轉化の研究は接合體論的觀點と、構成體論的觀點とを等しく必要とする。即ちそれは個人主義的—市場經濟的制約性の觀點と、普遍主義的—空間經濟的制約性の觀點の下に等しく行はれねばならぬ。動機について見る

と世界經濟的構造轉化及經濟政策的理念及び目的指定の意志的達成であるし、又個人主義的營利追求の無目的結果である。その外に戦争とか、自然的災害の如き偶然の原因が構造轉化を生じ得るが、それは考察の外に置く。世界經濟の構造轉化は市場の側と、空間の側とに依て制約せられる。それが科學的認識にとつての根本的差異である。……同一の現象とその轉化が屢々同時に個人主義的——市場經濟的目的追求と、營利經濟的目的追求とに服するが故を以て、之等の研究が困難であると云ふ事は、何等この方法を棄て去る理由とはならない。……二分は根本的に確立されねばならない。』

國民經濟又は空間經濟の下に何を理解するか、構成體論と接合體論とは如何なる仕方にて對立するかに就ては私自身ハルムスとは別個の考へを持つものであるが、それが直ちに引續いて私に對して要求される重要な課題であるが、こゝではそれへの前提としての何等かの意味での二つの理論の對立を取上げ、この對立を始めから無意識的に混同せる見解を排し、しかもこの對立を二律背反的なものと解せず、兩者の並存を許容する事に依て現實の極めて複雑な世界經濟の眞相に迫らし得るものである事を指示するに止める。